クルルン熊

どらやま　てっさ
道楽山鉄茶

クルルン熊（序編）

　久しぶりに休暇を取り信州に来た。山を散策し、露天風呂につかり、地の料理を食べ、初日にもかかわらず旅の醍醐味を十分に満喫することができた。
『おまけにこのサービスか‥‥』
　囲炉裏端で地酒を飲みながら珍味を味わう。酒も肴も民宿のサービスだった。
　鮎の薫製、ワサビの醤油漬け、それに、何だか良く分からないが肉の薫製のようなもの。干しが丁度良く、しっとり感が残っており、それでいて生臭くない。漬けダレはやや辛目だが、それによって肉の甘味が引き立っている。食通というほどでは無いが、酒と肴にうるさい私が初めて出会った珍味である。
「おやっさん、これ美味いね。何の肉だい？」
　私はそれを摘み上げ、民宿の親爺に尋ねた。
「ああ、そいつか。それは熊のキンタマじゃ」
「キ、キンタマ！？」
「そうじゃ、キンタマじゃ」
「へ〜‥‥　キンタマかぁ‥‥」
　今まで牛や馬のキンタマを刺身で食べた事は有る。珍しいから、と勧められて食ったが、さほど美味いものでは無かった。それに結局、いつでも何処でも食える物と判り、希少価値も感じなくなった。しかし今回は熊のキンタマである。捕獲頭数が少ない上、身体から少ししか取れない、希少価値は十分にある。そして、滅法美味かった。
「熊のキンタマって美味いもんだな」
「そうじゃろ、そうじゃろ」
「何処かで売っているのかい？」
「いいや、裏山で獲れたやつをわしが捌いたのじゃ」
「おやっさんが獲った？」
「そうじゃ」
「おやっさんが薫製にした？」
「そうじゃ」
「へ〜、大した腕だ」
「ふふ、そうかの」
　親爺は相好を崩しながら酒を注いできた。
　私は親爺のコップに返杯した。
　それから二人で飲み始めた。

　親爺の話によると、この付近の熊は「クルルン」と鳴きながら徘徊しているらしい。
　身体を木に擦りつけて「クルルン」と鳴き、岩に身体を擦りつけて「クルルン」と鳴き、地面に身体を擦りつけて「クルルン」と鳴き、風を感じて「クルルン」と鳴き、空を見上げて「クル

ルン」と鳴くらしい。
　親爺はこれを、天地精霊に対する挨拶だと言う。恵みをもたらす自然に対して尊敬と親愛の念を込めて挨拶しているのだと言う。
　私が、
「いやぁ～　そりゃぁ、マーキング行為じゃないのかなぁ～」
　とチャチャを入れると、親爺は顔を赤らめ、
「馬鹿を言え！、風や空にマーキングできるか！」
　と剣幕になったので、私は黙って話を聞くことにした。
「いいか、よく聞け。今の人間供が失った自然に対する感謝のこころ、それを熊達は持ち続けておるのじゃ。わしらが感謝せぬから、熊も感謝しないと思ったら大間違いじゃ。熊は、今も昔も自然と供に生きておる、そして自然に感謝しておる。自然の恩恵を受けながら感謝のこころを忘れてしまった人間どもは、大馬鹿者じゃ！」
　親爺は顔を真っ赤にして怒鳴った。随分と酒が回った様子で、コップを振り回しながら、
「熊が立派なのはキンタマだけじゃないぞ。肝も座っておる、心も篤い。それに比べてわしら人間はどうじゃ。ちっこいキンタマをぶら下げて、いつも金持ちや権力者にぺこぺこと擦り寄って、その鬱憤晴らしを弱い者にぶつける。馬鹿じゃ！、大馬鹿者じゃ！。わしもお前も、みんな、大馬鹿者なんじゃ～！」
　と、一人で盛り上がり、勝手に激昂していった。
　親爺のコップはとっくに空になっている。私は一息付かせようと、
「わかった、もう十分にわかったから、とにかく一杯飲もうよ」
　と手をつかみ、コップになみなみと酒を注いだ。
　溢れんばかりに注がれた酒に、親爺は、「おっとっとっ」とコップに口を寄せ、「ゴクゴク」と数口飲み、「ふぅ～」と息を吐いた。
　私が、「親っさん、ここは、酒も熊もいいねえ」と言ったら、親爺は、「ふふふ、そうじゃろ」と機嫌が良くなり、それからは穏やかな口調で、熊や天地精霊の話だけでなく、この地の風景・絶景の話や、動物達の話、そして珍味の話もしてくれた。
　その夜は、親爺が漬けた沢庵をポリポリかじり、酒をグビグビ飲み、酒宴はいつまでも続いた。

　気がついたら朝だった。
「お客人、どうじゃ、寝覚めは良いか？」
　ニコニコとした親爺の顔が目の前にあった。
「お前さんが急に横になったから、わしゃ心配したぞ。まあ、その後でグーグーいびきが聞こえたから死んだわけでは無いと思って、わしゃ安心したがの。ほ～ほっほっほっほ」
　親爺の酒臭い息を嗅ぎ、急に頭がどんよりと重くなり、胃もチクチクとしてきた。
「ごはんを食いなさるか？」
　親爺の誘いに、食欲が全く湧かない私は、
「いや、水をください」
　と応えた。
　飲みすぎた翌朝はいつも脱水症状を起こしている。こんな時はまず水を飲んで、それからどうするか、体調と相談するのが常だった。
「あいあい分かった、待っておれ」
　親爺は台所に行き、暫くしてヤカンをぶら下げながら戻ってきた。
「たっぷり水が入っておるから、気が済むまで飲みなされ」
　お膳の上に、「ゴン！」と重そうな音がしてヤカンが置かれた。
　私は冷たそうに水滴をまとっているヤカンを持ち、その口から直接水を飲みだした。
「ゴクゴクゴク」と音が鳴るたび、胃の中に水が流れていく。
‥‥　ああ‥‥。田舎の水は美味しいなぁ　‥‥
‥‥　五臓六腑に染み渡るこの感覚を何と表現したら良いのだろ　‥‥
‥‥　体中の細胞が喜んでいるこの感覚を何と表現したら良いのだろ　‥‥
‥‥　水～‥‥水～‥‥わたしは水さえあれば他に何もいらない　‥‥
　などと考えながら、ひたすら水を飲んでいたら、
「やめんか、飲みすぎたら腹をこわすぞ」
　と親爺にヤカンを奪われた。
「何じゃ！、この軽さは！」
　親爺はヤカンを小指に引っ掛け、ゆらゆらと揺らした。
「はは、あんまり美味かったんで、飲みすぎたかな。いや～‥‥おやっさん、ご馳走様でした」
　私はお腹を叩いた。
「ポン！」
　と、大きな音がした。
「飲みすぎじゃろ」
「ははは、飲みすぎかな」
　笑ったら身体が揺れて、腹が「ちゃぷちゃぷ」と鳴った。
「お前さん、腹が、ちゃぷちゃぷ言っとるぞ」
「ははは、言ってるね」
「なんちゅう腹じゃ」

「なんちゅう腹かね」
「ははははは‥‥」
　二人は笑い出して、笑うたびに私の腹がちゃぷちゃぷ言うのが可笑しくて、また笑って、そのままの勢いで迎え酒を飲み始めた。
　親爺と戯れ言を言い合いながら飲む酒は、いつの間にか迎え酒の域を超えて、宴会のようになってしまった。

寝覚めたら、囲炉裏の輝きが、薄暗い部屋の天井や壁でチラチラと踊っていた。
『もう夜なのか？‥‥』
身体を起こして辺りをうかがうと、窓から赤い陽光が差し込んでいて、今は夜では無く、たぶん夕方なのだと思った。正確な時間は分からないが、陽の光の角度が鋭かったので、日没まで一、二時間ぐらいかなとも思った。
囲炉裏を挟んで向かい側に、親爺が大の字になって眠っているのが見える。勝負をしていたわけでもないが何故か、『勝った』と思った。
夜になっても親爺が寝ていたら、身体を揺さぶって起こしてやろうかな、それとも、顔を覗き込みながら声をかけようかな、とボンヤリ考えていたら、急に喉の渇きと空腹を覚えた。お膳の上に大きなおにぎりとヤカン、そしてメモが置いてあり、
『良かったら食いなされ』
と書かれていた。
‥‥　又しても親爺より先に酔いつぶれたか　‥‥
昔は酒量に自信が有った。旨い物を食うと酒が飲みたくなり、酒を飲むと何を食っても旨く感じる。そんな繰り返しで、際限なく飲み食いしたものだ。最近は酒を飲むペースは昔と変わらないが、食べるペースが遅くなり、すぐに満腹感を感じる。あまり食べないで酒を飲むと酔いが回りやすい。酔いつぶれて寝込む事が多くなってきた。
それにしてもこの親爺は良く飲む。ほとんど食べずに飲んでばかりだから、結構回っているように見えるが、美味しそうに飲み続ける。私より酒に強いという事なのだろう、少し癪に障る。
『まあ、どうでもいいか‥‥』
お膳の上のヤカンを手に取り水を飲んでみた。生温くて美味しくなかった。
おにぎりは有り難いが、おにぎりより水が肝心だ。水は冷たいに限る。水を入れ替えようと、私はヤカンを持って台所に行った。
台所には大きな水瓶があり、中を覗くと水はたっぷり入っていたが、ヤカンの水と同じく生温かった。きっと昼間の気温でヤカンの水も、水瓶の水も温められたのだろう。秋とはいえ十月の上旬は、まだまだ夏の暑さが残る頃だ。
この家には冷たい水が無い。冷たい水は外に有る。
私は、冷たい水を求めて付近を散策することにした。
ヤカンの中の生温い水は、飲む気が起こらないので捨てていき、水を発見して喉の渇きを癒した後に食べるため、おにぎりは持って行くことにした。
左手におにぎり、右手にヤカン。
ほんの一時間程度で帰る予定だった。

民宿は山の中腹に在る。
此処へは麓から道路が通っていて、一キロ手前の大きな旅館まではバスが通れる幅広の道路、そこから先は軽自動車がやっと通れる細い道路になっている。大きな旅館からこの民宿までには民家が無いので、細い道路はこの民宿専用の道路と云っても良いだろう。
その道路もこの民宿で途切れている。そこから先に進むには登山道を歩くしか無い。
私は沢を探したいのだが、水がザワザワと流れる音が登山道の奥から聞こえるので、そちらに向かって歩いて行く事にした。
紅葉が色づき始めた山道を歩いていると、ところどころに栗が落ちている。帰りに拾い集めようと横目に歩いていくと、右側が開けた箇所に差しかかった。見ると、崖下に沢が流れていた。あそこに行けば冷たい水が手に入る。その場で下に降りる道を探したが、降りる道では無く、落ちる道しか見つからない。仕方がないので、そのまま数分歩いた。すると、なんとか下に降りられそうな所に辿り着いた。ただし、降りる事は出来ても、登るのが難しそうな崖だった。
私は、
『どうせどこかで降りるんだし、ここを降りて水を飲んでから、改めて上に昇る道を探せば、つじつまが合うんだろうね』
と考え、ここで下に降りることにした。
最初の数歩は具合の良いステップがあり、ひょいひょいと降りられたが、そこから先は手を使わなければ危ないコースだった。
『しまったなあ、手が使えない‥‥』
おにぎりとヤカンで両手がふさがっている。困った。
少し考え、ちょっと嫌だったが、おにぎりをヤカンの中に入れて片手を使えるようにした。おにぎりがヤカンの中に残っている水分を吸わないか、とか、バラバラにならないか、とか心配だったが、それでも食べられることに違いはなかろう、と考えれば、それほど悪い案では無いと思えてきた。
左手にヤカンを持ち、右手で岩にしがみ付く、そんな姿勢で三メートルほど降りた。
残りはあと一メートルほどだ。
‥‥　楽勝だったな　‥‥
‥‥　水〜‥‥、水〜‥‥、もうちょっとだけ待ってておくれ、水〜　‥‥
などと頭の中で叫んでいたら、手に持っていたヤカンが岩に擦れて、「ガリガリ」と音を立てた。
『いかん！　ヤカンの中に砂が入る！』
慌てて左手を思いっきり引いたら、勢いがつきすぎて右手も岩から離れてしまった。
『あ〜しまった‥‥』
と思った時はすでに手遅れだった。
私の身体は崖から飛び出し、すぐ下の岩場に落ちていった。
ヤカンを素早く手放したので、幸いな事に両手は自由になっている。
右手と左手、そして左足が一つの大きな岩の上に乗った、が、右足を見失った。

身体の左側でヤカンが宙を舞う気配を感じていたら、ゴキッという音がして、右膝に衝撃を感じた。そして直ぐに、右足が大きくバウンドし、身体が前転宙返りしながら河原に投げ出された。

右足の膝のあたりがウズウズとしている。むず痒いような感覚で、痺れた時に感じる、腫れぼったい感覚だ。皿の周りを指先で突付いても特に痛みを感じないが、直接に皿を突付くとキリキリとした刺すような痛みが走り、膝でも曲げようものならその何倍もの痛みが脳天を突き抜けていく。おそらく、打撲。それもかなりきつい打撲で、もしかしたら骨にひびが入っているのかも知れない。これでは立ち上がって歩くことも、四つん這いになって進むことも出来ない。

とりあえずその場で座り込み、辺りを見渡した。

右手に高さ五、六メートル程の険しく切り立った崖が有る。この崖を降りてきたのだが、今、改めて下から眺めてみて、こんな所を降りようとしたのは甘かったなと思った。

おにぎりやヤカンを持っているのなら崖など降りずに道を探してそこを降りるべきだ。両手が塞がっているのに崖を降りようとしたのは、酒が残っているせいだと思った。

『まあ、いまさら言っても仕方無いけど‥‥』

沢のほうに目を転じると、岩にぶつかり渦巻く水がごうごうと音を立てている。それを見ていると急に喉の渇きを感じた。

『ああそうだ、水を飲みに来たんだ』

なんとか水が飲める場所に行こう決め、両手を後ろに伸ばし、それから尻を引いたら、十センチぐらい後ずさり出来た。右足が地面に擦れて痛いので、左足の上に乗せると快適になる。慣れてくると一度に移動できる距離も伸び、移動サイクルも早くなる。程なくして崖から十数メートル離れた沢の縁まで辿り着いた。

身体を沢に平行にして、上半身を左にひねり傾けながら手で沢の水をすくって一口飲んでみた。冷たくて美味しかったが、ガブガブ飲む気にはならない。身体が冷えている。日が傾き、夜の寒さの気配が漂い始めてきた。

『さて、どうするかな‥‥』

と考えたが、大した事は出来そうもなかった。

此処で待っていたら親爺が探し出してくれるだろう。出来る事は、大声を張り上げて此処に居る事を伝えるぐらいか。

悲愴な声を上げるのは見っともないので、声色に気を使う。まずは小さく「おーい」と声を出し、少しずつ声を大きくしていった。親爺が来たら、「やあ！　待ってたよ！」と手を振る自分を夢想しながら、「おーい、親爺ー！、おやっさーん！」と、水音に負けじと声を張り上げていった。

崖の上に人影を感じた。

『おやっさん、来てくれたか』

嬉しくて頬が緩む。手を振って助けを求めたいが、緩んだ頬が引き締まるまで待ちたい。右目の端に親爺の黒い影を捉えながら、沢の下流に向かって「おーい」、空に向かって「おーい」と叫んでいたら、親爺が崖の上でうろうろしだした。

これ以上困らせたら申し訳ない。

親爺が立っている崖に向かい、「おーい、おやっさん、此処だよー、待ってたよー」と手を振ったら、親爺さんは今まで腰を曲げていたのだろうか急にすっくと立ち上がり、こちらを凝視

した。
　私は息を飲み込んだ。
　親爺だとばかり思っていた黒い影は、熊だった。
　熊は崖の上で仁王立ち、光りの無い目で私を睨んでいる。
　私は思わず目をそらした。
『嘘だろ？』と自問し、『嘘だ』と答えた。
　崖から落ちて大怪我をし、さらに、熊に出くわす‥‥。有り得ない。そんな酷い偶然が重なってたまるものか‥‥。あれは親爺に違いない‥‥。そうあって欲しい。
　恐る恐る横目で様子を覗ったら、熊が崖から降りようとしていた。
『なんてこった‥‥』
　やはり熊だ。それも特大サイズの熊だ。それがもうすぐ襲い掛かって来る。
　動かぬ右足を引き摺って、私は沢に飛び込んだ。
　水の冷たさで腕が縮こまる。手を伸ばしたいが、寒さから心臓を守ろうとする本能で、手が、腕が、胸を抱え、固まろうとする。役立たずの右足がぷかぷかと浮かび上がり、身体が横に傾く。左足で川底を蹴ったら、身体が仰向けになりながら水上を進み、息継ぎをした瞬間に顔が水中に没した。
　そして、意識が遠のいた。